

「神殿での少年イエス」

2015年04月24日

ルカによる福音書 2章41節～52節。さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったのので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。

少年イエスは12歳になった。男子は12歳から「律法の子」と言われ、律法を守る義務を負い、成人男子と見なされる。イスラエル最大の祭である過越祭には32km圏内に住む成人男子は参加することが義務付けられていた。ナザレはもっと遠かったが、ヨセフ・マリアの家族は、慣例に従い12歳になったイエスを連れ、過越祭を祝うためにエルサレム神殿に上った。この時、強盗から守るため、また、過越祭で屠って食べる小羊一頭を完食できるくらい的人数、15人から20人くらいの親類、知人の一団となって、巡礼に向かう。彼らは指揮者に合わせ、詩編の「都に上る歌」などを歌いながら喜びをもって上って行く。イエスは興味津々であったろう。

過越祭が終わり、帰途についた時、イエスはエルサレムに残っていた。両親は一日路を歩いた後、いないのに気付いて、親類、知人の間を探し回ったが、見つからなかった。子どもの教会で引率する時「アテンション プリーズ」という言葉から、要注意な子どもを私は「アテ男君」「アテ子ちゃん」と心の中で名付けている。「アテ男君」「アテ子ちゃん」に気を配っていれば、まず大丈夫である。両親は一日路を歩いて気付かなかったというから、イエスは「アテ男君」でなく、安心できる子であった。信頼していたイエスがいないことを知った両親は慌てて、捜しながらエルサレムに戻った。3日の後、イエスが神殿の境内で、学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり、質問したりしているのを見つけた。聞いていた人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。マリアは「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と叱った。イエスは「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と答えた。ルカは、この会話からイエスは神の子であると伝えている。それが、これからの記述で明らかにされていく。

イエスは家族と共にナザレに帰った。そして、両親に仕えて過ごした。母マリアはこれらのことをすべて心に納めていた。彼女は心に深く留め、思い巡らす思慮深い女性である。

イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された日々を過ごし、時を待った。